

# NANAWATA 01 NOTE WEB

2019  
AUTUMN

Exhibition 須恵 朋子  
Interview 斎賀 賢太郎



NANAWATA  
BOOKS

NANAWATAの店名は、川越の城下町の複雑に曲がりくねった細道「七曲(ななまがり)」の入口に位置することから、「七曲」の古い読み方である「ななわた」に由来しています。

清少納言の『枕草子』には、「七曲にまがれる玉の緒を貫きて蟻とほしとは知らずやあるらむ」という歌が登場します。曲がりくねった玉の穴に糸を通すという難題を引き受けた中将が、老親の助言によって、片方の穴に蜜を塗り、糸を結んだ蟻を別の穴から通して解決するという話です。

甘い食べものに導かれて、わたしたちの人生がより良い方へ向かいますように、との思いもこめています。



Exhibition #01

須恵 朋子

# 碧の彼方へ

2019年10月15日-2020年1月18日



—須恵さんと初めて会ったのは、丸木美術館に学芸員の実習で来たときですね。

もう17年も前になるんですね。当時、岡村さんはまだ非常勤で、私は女子美の院生でした。丸木俊さんが好きだったし、「原爆の図」に興味があった。普通の美術館より特殊な感じがして。社会的なことも含んでいたりするじゃないですか。公立の美術館とは違うんだろうなと。

—実習期間中は、ずっと模写をしていましたね。

はい。「原爆の図」のもとになった人物デッサンですね。俊さんだけじゃなく、位里さんのデッサンも模写しました。二人のアトリエだった小高文庫で。まだ全然片付いていなくて、すごく暑くて、本が雑然と置かれていた。

—須恵さんが人物を描いたのは、後にも先にも、それしか見てないんですけど。

人物、結構好きなんですけどね(笑)。大学の卒業制作前の100号くらいの絵が人物で、女子美の収蔵品になっています。そのときは杉板を簀子状に組んで、泥絵具に石膏を混ぜて下地をつくって、岩絵具や箔を使ったりして……妊婦のシルエットみたいな絵で、焼け出された人のように黒いんですよ。

—それは、ぜひ見てみたい。

ボロボロかもしれないですね。あまり保存のことも考えていなかつたので。今は樹脂膠を使ってるけど、その頃は強い膠やボンドを混ぜて接着したり、どういう素材がいいか実験ばかりしていて。簀子が

重くて、石膏さらに重くて、卒業制作の150号は、6人くらいが神輿状態でアトリエの階段から下ろした。すごい迷惑だったんですよ。

—卒業制作は人物じゃなかったんですか?

最初は人物も入っている絵を描いていたんです。その前に女子美的ツアーでインドに行ったから、人と街のカオスみたいな感じを描こうと思って描きはじめたんですけど、途中でどうしようもなく行き詰った。それで奥多摩に車で行って、奥多摩の風景から着想を得た絵になりました。

—その頃から植物や自然を描くようになった?

ああ、そのあたりからですかね。それから大学院に行って、屋久島へ通いはじめた。

でも学部の頃から、盛り上げる、みたいな、絵を描くっていうより、ものをつくる手ごたえがある作業は結構好きだったんです。

粒子の純粹なきれいさと絵具瓶を見て、日本画にひと目惚れしました。

—日本画は、あまり画面を盛り上げない?

盛り上げる人もいますけど、こんなに盛り上げる人はあまりいないかな。今はいろんな技法をやってる人がいるから、モリモリしてる人もいます。こうしなさい、とは女子美ではあまり言われなかつたですね。

—丸木俊とか三岸節子とか、須恵さん好きな作家は、いわゆる「日本画」の人ではないですよね。

そうなんですよ。私が日本画へ行くきっかけになったのは、高校生のときに通っていた美術予備校に藝大を出た先生がいて、日本画体験授業というのがあって。その頃は結構油絵を描いていたから、油絵に行くものだと先生たちに思われていたんですよ。でも日本画を体験して、粒子の純粋なきれいさを見て、なんかちょっといいなと……。Ⅲに絵具を入れて溶く、混ぜるという動作が、心を込められる感じがして。

そうしたら日本画の画材屋さんに行ってみなさいって言われて、上野の得応軒だったかな、最初に行ったのは。絵具瓶がばーっとならんでいて、もうそれで、一発ノックアウト。わたし、日本画に行きますって。油絵の先生に言ったら、えーって言われて。ひと目惚れみたいな感じですよね。

でも日本画の受験は鉛筆と水彩でしたが、木炭デッサンの方が得意だったんですよ。で、油絵の作家が好きだったんですよ。予備校のときに三岸節子さんの個展をデパートで見て、わー、すごいって思って。あとは野見山暁治さんとか。だいたい一番好きってなると、油絵の抽象っぽい人ですね。素材は日本画を選んだけど、内容的には具象を描きたいと思ったことがあまりない。

#### 初めて屋久島に行ったとき、これ、というものに出会ったんですか？

学生のときから自由課題では樹や根っこを描いていて、今と根本的には変わらないつもりです。大きい自然のなかの生命に心が動くというのは変わらない。

#### 一ひとつに決めたら、頑固に続けますよね。

心が動かないと、なかなか変わらない。興味が尽きるまでやってるところがあるって。

屋久島は10年やって、興味尽きたわけではないですが、いまは久高島の碧のシリーズをやっています。そろそろ7年なので、10年くらいをめどに、thoughtするけど。

#### 一時間軸が長い。

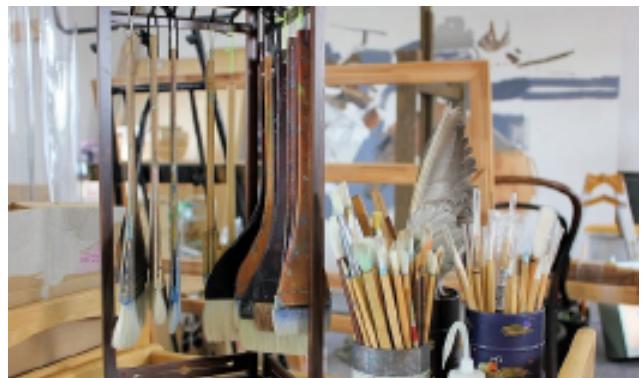
そうですかね。できるまでやろうというのはある。でも、できないんですけど。自分が思っているところまでは、なかなか……。

#### 一それが須恵さんの強みでもありますよね。

なんか、根気強いとか、打たれ強いとか、よく言われてました、昔。逆境に強い、か。

女子美のとき、松本俊喬先生に「君はめげない。逆境に強いよね」と言われたんです。作品について酷評されても、めげずに次の制作への原動力にしていたあたりかな。

#### もともと絵が大好きで、ずっと描き続けるって、決めていた。



#### 一小さいときからそうだったんですか？

頑固だったかもしれない。もともと絵が大好きで、小学校の図工の先生がすごく面白い男の先生で、その先生みたいな図工の先生になりましたかったんです。

図工が好きすぎて、高学年のとき熱があるので黙って学校へ行って、月曜の3、4時間目に図工を受けてから保健室に行って、おばあちゃんが迎えに来て家に帰ったら、40度くらい熱があって。どうしても図工を休みたくなかったんですね。図工が学校にいく、一番の楽しみだった。

#### 一本気で美術をやろうと思ったのはいつですか？

中学では美術部ではなくてボランティア部に入りました。特別支援級があって、支援級の子たちと交流したり、老人ホームに行ったり。その頃は福祉と美術に興味があったんだけど、高校はもう美術に行きたかった。

美術科のある学校を受けたいと言ったんだけど、高校くらいは普通科に行ってくれと親に言われて。都立高校に行ったら美術の予備校に行かせてあげると言われて、どうしても都立に行かなきゃって。予備校からはもうなんか、ずっと絵でした。

#### 一予備校や美大を出ても、絵を描き続けて生きている人は少ないですよね。

少ない。同級生でも3人とか。私入れて3、4人しか描いてない。一続けることの困難さもあるし、生活が成り立たないという問題もあるし。でも須恵さんは、最初から腹がすわっているように見えました。

そう、そう。もう、決まってたの(笑)。予備校のとき3年浪人しているので、2浪くらいのときに、もう入れてくれるところはないんじゃないのか、やめた方がいいのかな、と思った時期もあったんだけど。

でも、めげそうになると、その後に、絵がいいって先生に言われたりとか。人物を描いても、なんか絵かきさんみたいって言われて……。

#### 一だって、なるんだもん、と。

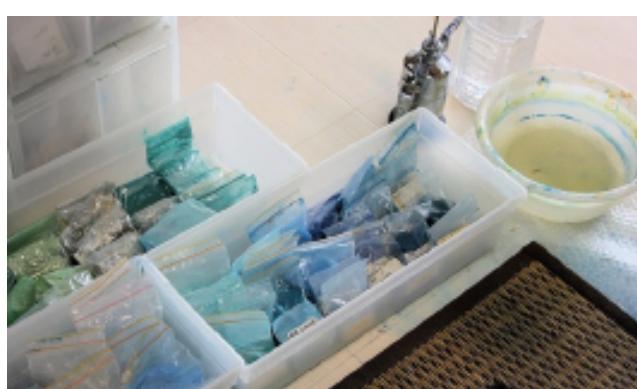
そうそう、そんな感じ。なるし！みたいな(笑)。

生活もそうなんだけど、いろんなことを絵が中心で。絵を描くために、どうやってお金を得たらいいか、とか。

父親には、絵なんて描いてどうするんだって、ずっと言われて。母親は三人きょうだいのうちひとりくらい美大に行ってもいいんじゃないって、応援してくれたんだけど。父親には、浪人するときに、泣いて頼んだ。どうしてもやりたいって。美大に行けなかったらこの世の終わりくらいに、そのときは思っていた。今思うと、行かなくたって描けるんだけど。

#### 一その経験があって、何ごとにも動じなくなった。

すんなり美大に入った人が、意外とあっさりやめたりとか、あるかも





しれない。辞める気はもう全然なかったな。思いこみが激しい(笑)。  
昔から。

**一屋久島とか久高島だって迷わないよね。**

そう、もう運命だと思ってるから。こういうこと言うと変な人だと思われるかもしれないけど、会うべくして会うと思っている。

**—そうじゃないとできないことってありますよね。迷っていたらできないこと。須恵さんは、最初からその覚悟ができていると感じた。それは、ある種の狂気で。**

そうそう。だからね、ちょっとおかしいかな(笑)。でも全然自分で悪いと思ってないけど。普通のOLとかまずなれないと、昔から思つた。

**—作家にとっては大事なこと。簡単に言うけど、なかなかできることではないですよね。**

できると思ったらできる、みたいな、変なそういうのがあるんですね。絵を続けられる環境にいたいと思ったら自分でも動くし、まわりがそういうふうになっていくと思っていて。

結婚するときも、ずっと絵を描き続けるっていうのが条件で。子どもが生まれてからも、いろいろあったけど、描くことはやめなかつた。

同世代では、子どもができたからも制作を続ける女性作家が少なくて。いまは若い世代で子育てをしながら制作を続ける作家も増えているので、情報交換したりして、嬉しいですよね。

**—もちろん、誰もがそういう環境になれるわけじゃないけど、その意味では須恵さんには「力」があるんだと思います。**

続ける「力」はあるかもしれない。



今年の夏から埼玉県川口市にある絲業工場跡を再利用した共同アトリエに移り、制作を行っている。特徴的な下地の盛り上がりは、砂に泥絵具を混ぜて素手でこね、画面に乗せていく。



学生や大学の助手の頃に描いた、人物クロッキーや木の根っこ、風景を描いたスケッチ。

一器用になんでもこなすとか、すぐに人よりうまくできるだけが「力」じゃないから。

私、器用じゃないからね。器用な人はいっぱいいるからね。

はじめは海の深い感じで、今は空。  
雲でも海でもいいんですよ。

一最初の個展が2004年のOギャラリー。あのときから、須恵さんの絵はできあがっていた。それから、ずっと長く描き続けている。同じ仕事を繰り返しているようだけど、色の使い方とかは少しずつ変わっていますね。

そう、自分のなかでは結構変わってるんですよ。技術的には年数やってるから、慣れたっていうものもある。素材も、ひとつのものを長く使う。盛り上げにしても、最初の屋久島の頃は下地のマチエルの上に描いているけど、久高島のシリーズはマチエル自体も絵っていうか。

一下地はどうやって盛り上げてるんですか？

粒子がそろった砂と泥絵具、泥絵具は彩雲堂っていう京都の画材屋さんのものなのですが、碎いてまぜて、最近は膠の代りにアートグルーっていう樹脂膠を使って。そのまま画面に手で一発で乗せていく。そこから色を塗り重ねて。久高島の海のシリーズは、パネルに張る前の平の紙の状態で盛り上げて、そのあとちょっと湿らせて、「揉み紙」という日本画の技法があるんですけど、揉み上げた紙ごと、むりやり伸ばして貼る。割れた状態になるんですけど、しわも引っ張って。それで、スクレーパーや篆刻刀を使って、立体要素を……

一ああ、彫刻みたいですね。

柳原義達さんとか好きですね。佐藤忠良さんとか。三岸節子さんと同じ世代の、おしゃれな感じというより、熱い人。

一割れたような表現は、久高島からですか？

そう。久高島に行って、こうしたらしいんじゃないかと聞いた。それまでは盛り上げていただけだったんだけど、ひび割れさせたら、海の感じになるかもしれないと思って、最初は10号の作品で試しにやってみて、それから7年ほど久高島のシリーズを続けています。

はじめは海の深い感じで、今は空。上にあがってきている。《碧のむこうに》は宇宙的な感じ。もはや海ではなくて、雲海。まあ、雲でも海でもいいんですよ。自然と自分がつながって、交信しているイメージ。

一空のシリーズは割れてないんですね。

そう、割れてないですね。今はまた、盛り上げに戻っているかな。割れたひびは意図しない要素が多いので、偶然性が大きいですね。

一下絵は全然描かない？

うーん、描くときもあります。木炭とか鉛筆とか。

一スケッチはするんですか？

しますよ。そんなに具象バリバリには描かないけど、根っここのシリーズとかありますよ。

一屋久島から久高島へ。南への憧れがあるんですか？

母親が九州、父親が四国出身というのも関係あるかもしれない。

2011年に福島第一原発事故があって、埼玉で子どもを育てて大丈夫かなって心配して、夏休みに初めて沖縄へ1か月くらい行ったんです。そのときは全然、沖縄を描くとか考えてなかったけど。

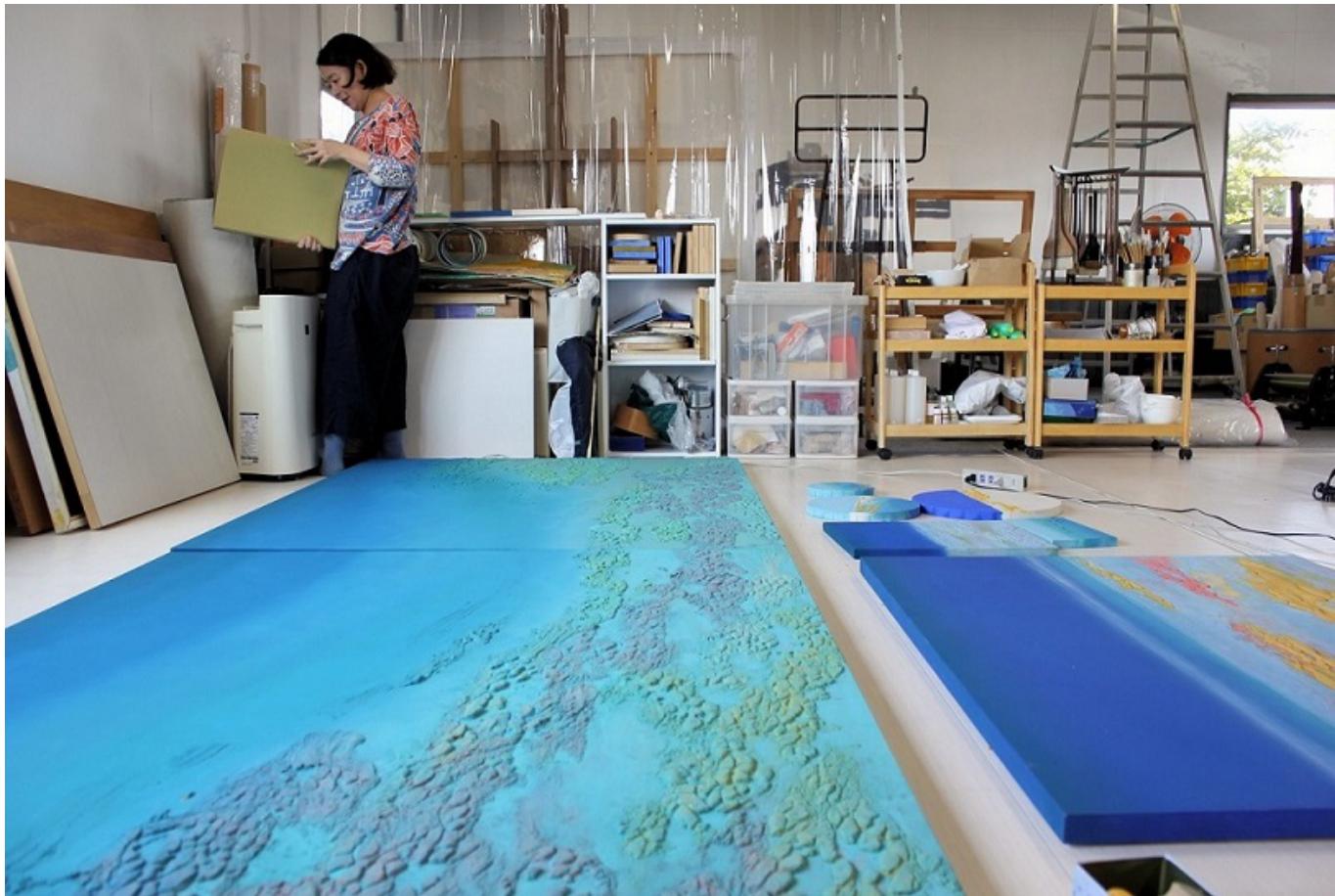
沖縄を描くようになったきっかけは、2012年の夏に母親が亡くなつたこと。ずっと実家の手伝いしていて、四十九日が終わったら、ガクッとやる気がなくなっていて。絵も描けないなってぼんやりしちゃって、このままではしょうがないと思って、暖かいところに行つたら開放的な気分になるかなと、沖縄を行つた。それまでは、重いものが身体にのしかかっている感じで、疲れがたまつて。それで本島に行ってたんですけど、ムサビ（武蔵野美大）を出た予備校のときの友だちが久高島に住んでいて、沖縄に來てるんだつたら久高島まで来なよって誘われて。

そのときは日帰りで行つたんだけど、久高島の海を見ていたら、憑いていたものがとれたような、お母さんが離れたかな、みたいな感じがあって。これは沖縄の海を描かなければいけないかも、と思って描いたのが、最初の10号。

まだアトリエを借りてないから、マンションで描いて。一作で終わるかなと思ったんですよ。最初から強い思いで取材に行つたわけじゃなかったから。でも描いて、それを続けてみようって思つて、久高島に通うようになって。

はじめは、何も知らずに……「神の島」とも知らずに久高島を行つたんですよ。普通、「神の島」って思つて行くじゃないですか。私は友だちがいるから、来なよっていうから行つて（笑）。

アマミキヨ（琉球開闢の女神）も知らなくて。友だちの夫から説



明を聞いて、凄いところだったんだ、それでかーと。すごく楽になって助かったし、島自体のパワーも感じたので、次の年から毎年行っています。

**生と死の両方を考えるようになった。  
ふたつの世界がつながっていると。**

**一屋久島から久高島に変わるとときは、どんな決断をしたんですか？**

10号のときは、それを描いておかなければいけない気がした。海に行って、自分も解放されて。描き残して気が済んで終わりかなと思ったんですけど、やっぱりもう一回行きたいという衝動があった。それで行ったら、描こう……と。

**一屋久島はもう描くのはやめよう？**

いや、そんなことはなくて、たぶん、そっちにぎゅーっと持っていたから。屋久島もまた行きたいと思うんですけど。屋久島の空港からフェリー乗り場のあいだの結婚式場に、自分の作品があるんですよ。それを現地で観たことがないから、また行きたいなとは思うんですけど。

いまは、屋久島のときは描き方もスケッチも違ってきています。母親を亡くしたっていう心境の変化は、大きかった。自分がブルーに、色に癒されたところもあります。

屋久島のシリーズの頃は、強いエネルギーを出したいという意識が強かったです。

一久高島のシリーズは、平面的な部分が増えたせいか、動のエネルギーとは違うものを感じます。

そうそう。なんて言うか、身内の死で、生ばっかり考えていたのが、動くエネルギーから静かなエネルギーに変わってきて。

**一突き抜けた感じ。世の中は無常なのです、と。**

(笑) この海の向こうにはニライカナイという理想郷があって、母親と会える、つながっているというのを、久高島で感じました。

**一屋久島のときは、そういう感覚はなかった。**

屋久島のときは、生きるばっかりというか。いまは生と死の両方を考えるようになったのかもしれない。生きる世界と死ぬ世界が、つながっていると。

**一今後は、どんな絵を描いていくのでしょうか？**

どこに行くんだろう、という感じです。たぶん、出会うものが来たら、感じるんじゃないかな。

海のときは、深く深くもぐっていくというか、自分が深いところとつながっているイメージで描いていた。まだ母の死から、感情的に復帰してなかったのかもしれない。空の方が、少しだけ客観的に引いたイメージかな。

**一時間が少しずつ、そういう気持ちにさせて。**

そうそう。

**一鮮やかな色彩の奥には、須恵さんが積み重ねた時間があるのですね。最後に今後の抱負を。**

ありがたいことに、展示させて頂く機会が増えて忙しくなりましたが、制作への思いは変わらず、地道にやっていくだけです。これからも貪欲に制作していくたいと思います。

**一ありがとうございました。期待しています。**

(2019年8月29日、聞き手：岡村幸宣)



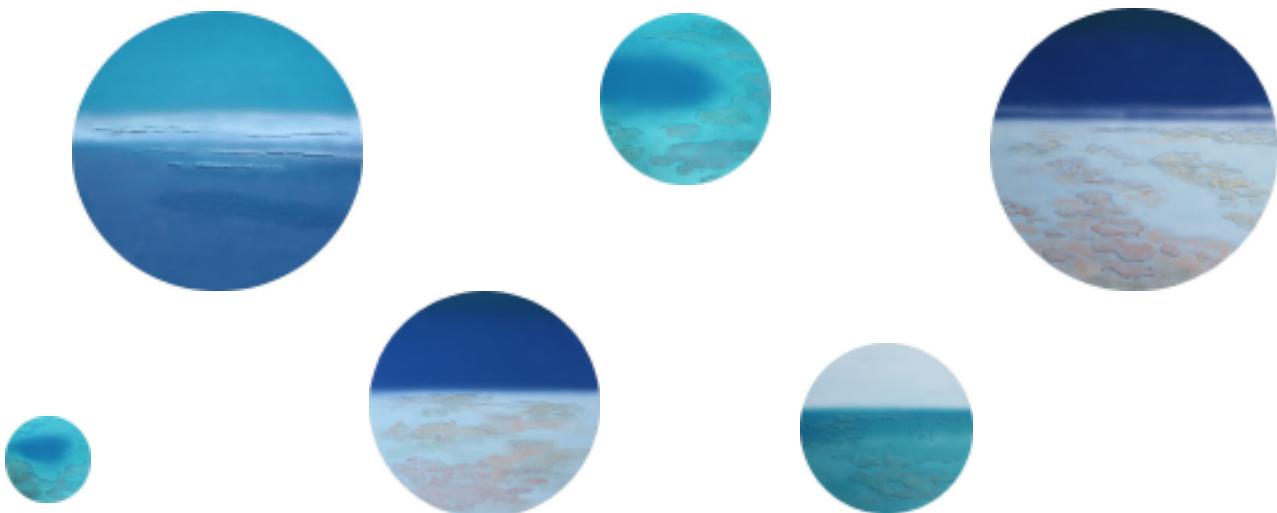
碧のむこうに 2019年、土佐麻紙、岩絵具、樹脂膠、130.3×582cm



神の島より 2019年、土佐麻紙、岩絵具、樹脂膠、130×162cm



神の島より～海の彼方に～ 2018年、土佐麻紙、岩絵具、樹脂膠、72.7×91cm



左から:

- |                    |                          |
|--------------------|--------------------------|
| 神の島より～円形 XI～       | 2019年、土佐麻紙、岩絵具、樹脂膠、Φ15cm |
| 神の島に続く空～円形 II～     | 2019年、土佐麻紙、岩絵具、樹脂膠、Φ50cm |
| 碧のむこうに～円形 III～     | 2019年、土佐麻紙、岩絵具、樹脂膠、Φ40cm |
| 神の島より～円形 X～        | 2019年、土佐麻紙、岩絵具、樹脂膠、Φ30cm |
| 神の島より～海の彼方に円形 VII～ | 2019年、土佐麻紙、岩絵具、樹脂膠、Φ30cm |
| 碧のむこうに～円形 V～       | 2019年、土佐麻紙、岩絵具、樹脂膠、Φ50cm |

### 須恵 朋子 すえともこ

- 1975年 東京都に生まれる。  
 2003年 女子美術大学大学院美術研究科修士課程美術専攻(日本画)修了  
 2005年 春季創画展 ('07、「09、「11～'19)  
 2006年 創画展 ('15～'18)  
 2010年 韓国国際美術祭(ソウル美術館・韓国、「11)  
 Emerging Contemporary Artists of Japan 2010展(2/20 Galleryニューヨーク'11、「12 )  
 2011年 上海国際サロン展(上海大東方美術館・中国)  
 Onward - Navigating the Japanese Future 2011展(Hive Galleryロサンゼルス)  
 2012年 Selected works from Japan 2012 展(Michi Galley,ニューヨーク)  
 アジア現代美術祭「Asia modern Art Expo」(成都美術中心・中国)  
 2013年 RED DOT ART FAIR MIAMI 2013(マイアミ・アメリカ)  
 どこかでお会いしましたね展(うらわ美術館、埼玉会館、「14～'19)  
 上海交通大学女子美術大学「中日友好国際交流展」(上海交通大学・中国)  
 Abstraction2013 展(ギャラリーアートポイント・東京)  
 2016年 美術新人賞デビュー2016入選作品展(ギャラリー和田・東京)  
 A plus viewing 01 For the city of heritage|美術家からの提案(旧田中家住宅・埼玉)  
 2017年 Contact (表参道画廊 + MUSEE F・東京、「19)  
 總々展(小津和紙 小津ギャラリー・東京、「19 )  
 Between the Lines(Parasol Projects・ニューヨーク)  
 2018年 地域の中のアートな居場所(川口市立アートギャラリーアトリア・埼玉)  
 Sprout! NISHIAZABU vol.2 須恵朋子(大泉工場NISHIAZABU・東京)  
 Pepin at arca Project Part4 須恵朋子(Beauty Parlor arca・東京)  
 2019年 JAPANISM IN 2019-日本の現代美術に出会う(SECOND MUSEUM・韓国ソウル)  
 第5回東京国際美術祭2019(好文画廊・東京)  
 真夏の壱伍祭(SAN-AI GALLERY+contemporary art)

その他、WALLS TOKYO、ギャラリー和田、Gallery Pepin、Oギャラリー、アートプレイスK、で個展。グループ展示多数／女子美術大学美術資料館収蔵作品賞、美術新人賞デビュー2016準グランプリ／女子美術大学美術館・現代美術資料センターに作品収蔵。創画会会友。須恵朋子WEBサイト <http://tsue.sakura.ne.jp/>





photographs by Takada Mayuko

**須恵** わたしは2003年に女子美術大の大学院を修了して、2004年に初個展を開きました。

**小勝** 子どもの頃から絵を描くのが好きだったんですか？

**須恵** 物心ついた頃から好きでした。工作の方が好きでしたが。

**小勝** 日本画を選んだきっかけは？

**須恵** 高校生のときは油絵を描いていて、予備校で日本画体験をしたときに、お皿で絵具を溶くのが新鮮で。絵具がきれいっていう話をしたら、上野の日本画の画材屋さんに見に行ったらどうかと言われて、それで見に行って、もう、わたし日本画に行くって思ってしまった。

**小勝** 岩絵具がグラデーションのように並んでいると、たしかにすごくきれいですよね。

**須恵** 心は油絵の精神というか、古典的な日本画というタイプではなかったんですけど、絵具瓶がならんでいるのを見て、一目惚れ。日本画を受験することになりました。

**小勝** 女子美は、特定の先生につかないそうですね。

**須恵** 東京藝大とかは、大学院に行くと研究室を選ぶんですけど、女子美の大学院は4名の教授と2名の名誉教授全員に毎回批評をしていただくんです。

**小勝** 盛り上げる絵を描く先生はいらっしゃる？

**須恵** 当時の女子美の日本画の先生は……わたしのようには盛り上げてないです（笑）。現代的な絵を描かれる先生もいらっしゃいましたけど、今のわたしのように大きく盛り上げる先生はいらっしゃらなかったですね。

**小勝** 須恵さんの絵は、非常に美しいブルーの色彩が目を引きますけど、もうひとつ、盛り上がる画面の絵肌が特徴だと思います。それは初個展のときから？

**須恵** その前からです。大学1、2年のときは絵具の基礎的な扱い方を教えていただくんんですけど、そのあとは表現に関しては

自由というか。現代的な先生も非常勤でいらっしゃる……うーん、いつからですかね。学部のときは、杉の板を簀子状にして、泥絵具と石膏を塗って下地にして、削って、という作業をしていたんです。大学院に行って粒子の粗い砂を使いはじめて。

**小勝** どういうところで売っているんですか？

**須恵** ハンズで売ってたりとか（笑）。「北米大陸の砂」とか、何とかの砂シリーズというのがあるんです。

**小勝** 自分で採取されることはないですか？

**須恵** あります、あります。女子美術大学の日本画研究室の特徴として、岩絵具について研究されている橋本弘安先生がいらっしゃって、粉碎機で岩を碎いて絵具を作るんです。

**小勝** 須恵さんは創画会に所属されていますが、なぜ創画展に応募されるようになったんですか？

**須恵** 2005年が最初なんですけど、女子美の先生が出品されていて。その頃、内田あぐりさんとか強烈な先生方がいらっしゃったので、わたしも出してみたいと思いました。最初に創画展に入選したのは根っここの絵です。女子美の近くに、公園を掘り返して根っこがいっぱい出た場所があったんです。それを捨てるというので、工事の人に根っこをいただいて窓に並べて。踊っているみたいで面白いなと思って。

**小勝** 根っこは、生命の根幹のイメージですか？

**須恵** はい。人間の生命のイメージも重なっています。

**小勝** 出産されてから、作品のサイズが変わりましたか？

**須恵** 2007年に出産をして、ちょっと小さく……大きい絵を描いても落選したりとか、いろいろあったんです。子育てしながらというのは厳しくて。産後3か月くらいで義母に子どもを預けて、150号の絵を描いたんですけど、創画展に入らなくて。作品も思うようにできず、時間もとれず、子どもに眼の病気も見つかったりしたんで、これは両方やっていくのは無理というか、両



## Kokatsu Reiko

### 小勝 禮子

1955年埼玉県生まれ。専門は近現代美術史、ジェンダー論。1984年より2016年まで栃木県立美術館学芸員として、「奔る女たち 女性画家の戦前・戦後」展(2001)、「アジアをつなぐ—境界を生きる女たち 1984-2012」展(2012-13年)などの企画を手がける。共著に、香川檀・小勝禮子『記憶の網目をたぐる—アートとジェンダーをめぐる対話』(彩樹社、2007年)、北原恵編『アジアの女性身体はいかに描かれたか』(青弓社、2013年)など。

方だめになるなと思って、やむなく休止しました。

**小勝** 再び描くのは、お子さんが幼稚園に入ってから?

**須恵** もう少し前、2010年くらいから大きいものも描きはじめましたね。

**小勝** 創画展には出していたんですか?

**須恵** 春は出していて、秋は出しても落ちたりとか、厳しい時代でした。2011年から2012年にかけて、義母が病気になって亡くなり、以前から闘病していた母が亡くなりました。その後、2013年に久高島へ行って、青い絵を描きはじめました。

**小勝** それはやっぱり、久高島には神が宿るという話をお聞きになったり、美しい沖縄の海に心を惹かれたとか?

**須恵** きっかけは母親を失くして、実家の手伝いに行っているうちに、肩や頭が凝り固まって、南の島に行けば解放されるんじゃないかと思ったんです。それで久高島に嫁いだ友人に誘われて、最初は神の島なんて知らなかったんですけど。海を見ていたら肩の重みが海に吸い込まれるように消えて、あ、お母さん下りたかも、と救われた気がして。その後に島の話を聞いて、わたしがここに来たのもきっと意味があったのだろうと思いました。海の深い部分と、自分の心の奥がつながったようになったので、この感覚を残しておこうと思って描いたんです。

**小勝** 身近な心の支えであった人を失くした体験が大きかったんでしょうね。

**須恵** そうですね。それまで青い絵具を使ってなかつたんです。青は難しい色という先入観があったんですけど、沖縄のブルーは特別で。一枚描いたら満足かなと思ったんですけど、今まで続くとは思わなかつたです。

**小勝** その青の中で盛り上がっている部分があるのが、須恵さんの絵の大きな特徴だと思いますが。

**須恵** 海の底のような「神の島より」のシリーズは、粒子の粗い砂を泥絵具と混ぜてベタッと乗せた後に紙を湿らせてぐしゃぐしゃっとして貼り込んで、そのあと削っているんですけど、手応えのある仕事が気に入っています。さらっと描くんじゃなくて、自分のなかで実感が欲しいというか。

**小勝** 当然絵画なので平面なんですけど、色彩と凸凹した部分の組み合わせで、ひとつの面のなかに、奥に向かって吸い込まれていくような何層もの深さが生まれていますね。

**須恵** 自分でも吸い込まれたいというか、吸い込まれそうになるようにと思いながらやっています。

**小勝** ニライカナイという題の絵もありますね。

**須恵** ニライカナイは沖縄の東の海の彼方にあると言われる理想郷です。その先に、自分の母親がいるんじゃないかな、魂がつながっているんじゃないかなと思いながら描きました。

**小勝** 須恵さんの発表は、個展と、他分野の作家たちとのグループ展、創画展と三つあるようですが、創画展に発表を続けているのは何故ですか? 日本的な手法を使っても団体展に所属しない現代作家も多いと思うんですけど、あえて創画展に出品を続ける理由はあるんですか?

**須恵** まず、大きい作品を定期的に描くためのモチベーションを保つことがあります。格好良い、強い先生方が創画会から抜けられた時期に、わたしも迷ったときもあったんですけど、締切までに大きいのを描くというのも自分に必要だなと思って。

**小勝** 創画展として会場で見られる場合と、こういう個展、ほかの現代アートの人たちとのグループ展と、同じ絵画であっても見え方は全然違ってくると思うんですけど。

**須恵** 違いますね。創画展は勉強の場っていう感じです。女子美出身の先輩、後輩もたくさんいるので、自分の絵を客観的に見る機会ですね。ほかのグループ展にも出すんですけど、またちょっと違いますね。ほかの分野の作家とならべると、日本画というだけで目立つこともあるんですが、同じ日本画がいっぱいあるなかで、自分がどう見えるのかなと……。

**小勝** 現代の日本画の中での位置を確かめたいんですか。

**須恵** そういうところはあります。創画会では、わたしは異色なのではと思っているんですが、凸凹している人もそれほどないし、色がぱっと青い人もあまりいません。

**小勝** 自分の力量が一番發揮できる場所は?

**須恵** 個展です。自分の作品をならべて、誰とも比べられず、空間を自分の思い通りにできるというのは、一番望ましいです。でもグループ展や団体展で、場所が変わってどう見えてくるのかは勉強になります。団体展は、出している方たちとの生存確認じゃないんですけど、今どうしているかと。日本画の作家同士で、励まし合いもあります。

**小勝** 女子美術大学はどうして選ばれたんですか?

**須恵** 日本画を選べる大学は少なくて、関東だと東京藝大と女子美と多摩美、武蔵美だけで、一応、東京藝大を目指したんですけど、なかなか入れてもらえず、もう女子美でがんばろうと。

**小勝** 多摩美や武蔵美よりも女子美を選んだ理由は?

**須恵** 高校は共学だったんで、女性だけの環境で絵に没頭したいというか。男女のいざこざとかに気を紛らわせず……。

**小勝** 女子美に入って、そうできた。

**須恵** そうですね。すべてが美術に関係する勉強で、こんなに楽しい環境はないと。なんて幸せと思って、空いている時間はずっと制作していました。

**小勝** 最近読んだ『〈女流〉放談』という本で、1980年代にドイツ人の研究者が、円地文子さんら日本の女性作家にインタビューして、女性だけの環境で存分に力を發揮する期間が若い頃にあってもいいんじゃないかと聞いていました。わたしも女子大学に行ったんですけど、小学生の頃から絵を描くのが好きで、漫画研究会を立ち上げたんです。当時は少女漫画の全盛時代で。それで早稲田の研究会と交流すると、早稲田の女子学生は、力仕事は全部男にやらせて、しなしなした感じで(笑)。わたしたちは何でも自分でやらなきゃいけないから、共学の女子に違和

感がって。大学院はわたしも早稲田に変わったんですけども。一定期間、女子だけの環境は面白いなって思います。

**須恵** みんな強くなるんですかね（笑）。力仕事も自分たちでやるんですけど……男の方と言ったら先生くらいしかいないので、先生を使うわけにはいかない（笑）。

**小勝** 教える人が男性で教わる人が女性というのは、権力関係に結びつく、上下関係そのままという感じもしないではないですが、そんなことはなかったですか？

**須恵** わたしが学生のときは3人が男性の先生で1人が女性だったんですが、女性の先生は女子美出身の方で、とにかく強かった印象ですね。

**小勝** 現在はどうですか？

**須恵** 男性2人女性2人で、女性2人は女子美の卒業生です。

**小勝** 出産されてから、しばらく大きな作品が描けない時期があったそうですが。

**須恵** がんばろうと思っても、授乳で寝不足になって……男の人もおっぱい出ればいいのにな、と思った。そしたら公平なのに（笑）。夜の寝不足が一番こたえて。昼に子どもといっしょに寝ていましたけど、起きているあいだに描いて、家事やって、と全部をこなすのは体力的に厳しくて、やむなくお休みして。

**小勝** それが2～3年くらいですか？

**須恵** そうですね、2年ちょっとくらい。

**小勝** 比較的短いですよね。その後復帰できたというは、結婚される前から旦那さんとはそういう約束だった？

**須恵** わたしは絵描きでやるから結婚しないと言っていたんですよ、親には。父親は人並みに結婚してくれとか言って。人並みってなんだ、とか思って（笑）。それで結婚の条件は、絵を続けることを容認してくれる人、と。

**小勝** 旦那さんは美術関係ではない？

**須恵** 美術が好きなサラリーマン。

**小勝** 一番良いですね（笑）

**須恵** 理想（笑）

**小勝** ちゃんとお金を稼いでくれる（笑）

**須恵** 自分の生活は自分で稼げばいいと思っていたんですけど、制作を容認してくれる良い方が現れたので、結婚できた。

**小勝** お子さんは大きくなつて？

**須恵** 12歳です。小学校の中学生くらいからは、お母さん遅く帰ってきてもいいよ、と。むしろ家にいたら自由時間が少なくなるから、ゆっくり帰ってきて、と言われて。今は、土日は夫に任せっきりで、心苦しいところもあったり、なつたり（笑）。つい制作に没頭してしまうので。

**小勝** アトリエは別な場所に？

**須恵** はい、6年前から。最初は自宅のマンションで描いていたんですけど、大きい作品は描けないし、作品はたまっていくので。日本画は床に敷いて絵具を塗って乾かすので、床面積が必要なんですよ。作品が増えるとどんどん狭くなつて、もう限界という頃に、川口市の旧中学校を委託されたアート支援団体からアトリエを借りることになつて。いまはまた、やっぱり別の学校の跡地にちょっと前に移つて。4～5m四方のスペースがあるところです。作家ってスペースの問題が切実で。広い家だったらいいんですけど、なかなかそういう家もないんで。

**小勝** あとは切り替えもできますね。通勤しているみたいに。



**須恵** 家で描いてたときは、家事とか育児とか、生活音が入ってくると、集中力が切れちゃうので。自宅じゃないところを借りれば集中できます。

**小勝** お母さんが亡くなる前に、介護はなかつたんですか？

**須恵** 看病ですね。病院から退院したときに、義理のお母さんは近くに住んでいたので、お手伝いとか。

**小勝** その時期は制作に打ち込むことができなかつた？

**須恵** そうですね。ガンガンやるというより、抑えめに。展覧会のスケジュールを調整しながら……

**小勝** そういう体験が須恵さんに蓄積されて、いまの青い世界に到つたと言えますよね。

**須恵** 久高島は母親に呼ばれたんじゃないかなと思っていて。わたしは引きが強いところに呼ばれるんです。そこで描かされている、描かなきゃいけないという思いがあります。

**小勝** 女性に限らず男性でも、画家であり続けることが目標としてあるわけですが、それ以外の人生のできごとも全部含めてひとりの作家を形づくっていくことになるんだと思いました。

**須恵** 義母にしても母にしても、子どもの成長とか、今回の個展を見てほしかった気持ちはありますけど……母が導いてくれた道なんだろうなと思っています。

**小勝** 女性画家の先達で、お好きな方はありますか？

**須恵** 女子美の先輩の三岸節子さんは心の師匠です。日本画をやっているのに日本画の作家じゃないんですけど（笑）。

**小勝** 三岸さんのどういうところが好きですか？

**須恵** 魂を絵に全部注ぎ込んでいる感じ。生きた、描いた、愛した、と……『花より花らしく』という本があるんですけど、本当に絵画に人生を捧げているところが好きです。

**小勝** 三岸節子さんも、たいへんな苦労をしながら、自分が描きたい絵を探つていった方ですね。ただ、夫の三岸好太郎がつくつた独立美術協会は、戦前は女性を会員にしなかつたんです。それで新制作派協会という別の会に入った。それが後の創画会につながるという歴史があるんですね。でも現在の創画会会員の女性の割合は……

**須恵** 2割弱です。物故会員は数名だと思います。

**小勝** 今の時代にロールモデルとなるような女性作家は少ないんですね。がんばっている女性作家はたくさんいますけれども、社会的なシステムの問題もあり、十分な評価の機会がない。ぜひ、次の若い世代のモデルになるような活動を、須恵朋子さんに期待したいと思っています。

（抄録まとめ：岡村幸宣）

**齋賀 賢太郎**

# 未来のための、家をつくる

さいが けんたろう

1981年生。齋賀設計工務二代目社長。

2011年の東日本大震災をきっかけに、家づくりを根本的に見直し、断熱、高気密を重視した住宅の建設に取り組む。

**齋賀設計工務(本社)**

350-1205 埼玉県日高市大字原宿773番地1

フリーダイヤル:0120-414-552

電話:042-989-2100 FAX:042-989-2277

ウェブサイト <https://saiga-s.com/>

**仙台支店**

981-3117 宮城県仙台市泉区市名坂沖101-9

電話 :022-702-7310 FAX:022-765-2380



## 東日本大震災を機に省エネ化へ

**Y(岡村幸宣)** インタビューの時点では、まだ店舗部分と外構の工事が続いているんですが、2階の住居には、すでに住みはじめています。今回、低燃費住宅の工法で店舗兼住宅を建てるにあたって、齋賀さんにはたいへんお世話になりました。

**S(齋賀賢太郎)** まだ住みはじめてから10日くらいですか？

**T(岡村淑子)** そうですね、10日になります。

**S** どうですか、まわりの音は？

**Y** 工事の音は少し聞こえるけれども、雨はまったくわからないですね。

**S** みなさん、本当にそうおっしゃいます。こないだの台風のときも、オーナーさんみなさんに連絡したんですけど、音もしなくて、大丈夫でしたと。

この家も、前の道は意外と人通りがあるけれども、音がしないですよね。

**T** 道路沿いの感じは、まったくしないですね。

**S** 音に関しては、やれることはやったんで。

**T** あとは壁が白いから、すごく明るく感じます。

**S** 窓が一般の家より小さかったり、少なかつたりするので、家が建つまでは皆さん不安がるんですけど、天井と壁の縫手もなくしているので、反射光でだいぶ明るくなっているはずです。

**Y** とりあえず、10日間はとても快適でした。

**S** これからまた寒くなりますが、魔法瓶みたいな住宅なので冬の

方が得意ですね。熱は調理していても出るから、冬の温度の方が保ちやすいんです。夏は空気自体が暑いので、窓からも温まってくる。それはエアコンで取り除くしかないんですね。

**Y** まずは、低燃費の住宅を始めたきっかけについてお聞かせください。

**S** ぼくは工務店の二代目になります。実際に継いだのは去年ですが、それまでは父と一緒にやっていて、父は土地を仕入れて家を建ててセットで売るという、分譲という商売をずっとやっていたんです。うまい具合に時代の流れに乗って、不動産をメインにして、会社としては伸びました。不動産は土地の価値で勝負するんで、家にはそれほど力を入れなくても良かった。けれどもそれでは結局、資本力の大きいところが勝つわけです。大手は建物を安く作るので、価格破壊が起きる。そうすると、彼らより建物は良いんだけど、土地とセットになると価値がお客さんに伝わらないので、われわれも値下げしなければならず、徐々に収益が悪くなりはじめましたんですね。

ぼくが今入社15年目くらいだから、落ちはじめていたのを理解していたんで、ほかの仕事をしないといけないと思っていたんです。それで工務店の方針に立ち返って、分譲以外の仕事をやったほうがいいんじゃないかと父と話して、じゃあ何をするかと。たとえばデザインに特化したのをやろうとか、いろんな選択肢があったんですが、2011年に震災が起きて、原発事故や計画停電があって。日本にエネルギーがないということは、みんなわかっていたのに、そこに蓋をしていましたというか…。

**Y** 実感がなかったんですよね。



「建て方」の日を前に、足場が組まれ、資材が運びこまれた現場

S 実は、家ってすごくエネルギーを使うんですね。水をお湯に変えるとか、もちろんエアコンもそうですし。人間が快適に過ごそうと思うとエネルギーを使わなくちゃいけない。そのエネルギー源って、電気であり、ガスであり、ガソリンとか燃料もそうですけど。それが、日本にはないじゃないですか。そのことを思い知つて。こういうエネルギーを使う仕事をしていて、よりエネルギーを使わないといけない家を作るのはよくないんじゃないかなと。じゃあ、注文住宅でも、エネルギーを抑えることを考えて仕事をしている人のところで学ぼうと思って、そうしたら低燃費住宅、いまはウェルネストホームですけど、その普及をしていた早田という人に出会ったんです。この住宅はいいなと思って、勉強会に参加して。

ドイツの建築の考え方なんですね。ドイツはエネルギー問題の先進国ですし、住宅の高気密高断熱化についても進んでいます。

## 高気密、高断熱の良さは体感できる

Y 考え方としては新しかったんですね。

S もちろんその前にも取り組んでいたグループはあります。でも震災以降に火がついた。ぼくと同じで、2011年を機に考え方を変えた人は多いと思います。ようやく日本も住宅を省エネ化しようという大きな流れが来て。その最先端だと思いましたね。それで最初に川越でモデルハウスを建てたんです。予想通り、分譲の仕事はどんどん減っていって、いまはゼロです。普通なら倒産しているけど、注文住宅にシフトして。会社を継ぐ前から自由にやらせてくれた父には感謝していますね。注文住宅の低燃費の事業も、最初から爆発的に増えたわけではないです。ここ数年で一気に増えてきた感じです。

Y いま、すごく忙しそうですね。

S 忙しいです。おかげさまで（笑）。

Y うちのせいで（笑）。

S はははは（笑）。ちょうどクロスした感じですね。昔の仕事の流れで多少下請けもあるので、今はほぼ八割が低燃費の仕事ですが、来年の受注は100%低燃費になる。ここでようやく切り替わったという感じです。

Y それだけ需要があるということですね。

S あると思います。ぼくははじめたときからあると思っていたんですけど、そのときは正直まだなかつたですね。絶対にこの高性能の家は売れると思ったし、川越にモデルハウスを建てたら、すぐ売れると思いましたもんね。でも、まったく売れなかつた（笑）。

T モデルハウスの前で、社長みずから旗を振つてたんですね（笑）。うちもすぐ近所に住んでいたのに、すみません、まったく気づかなかつた。

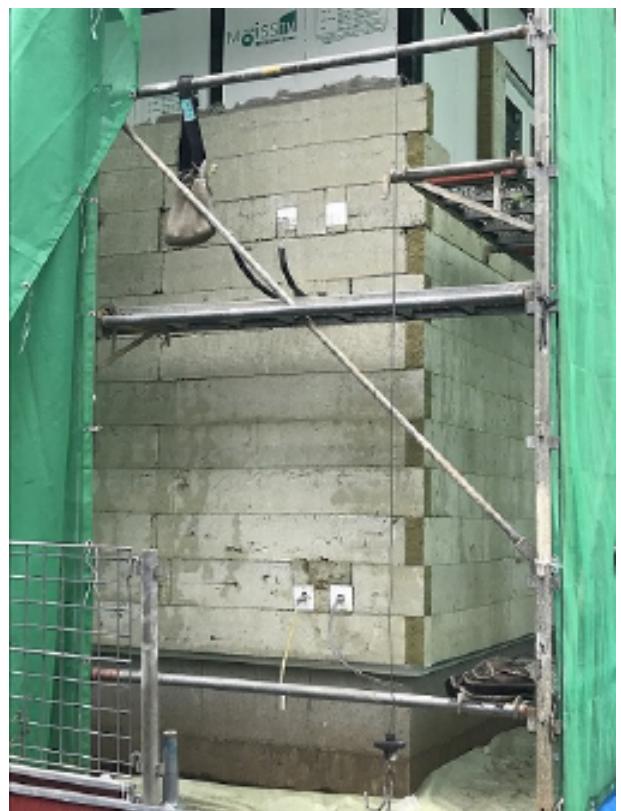
S 注文住宅の売り方がわからないから（笑）。あのモデルハウスで受注した仕事は、実際にはないです。ただ、高性能の低燃費をはじめしたことによって、やる気のある社員が集まって、総入れ替えになつた。社員も肌感覚で、こういうものでなければ世の中に求められないということがわかっているんですね。

Y そんなに違うものなんですか？

S 違いますね。高気密、高断熱という言葉だけが今いっぱい使われていますが、建物の性能で言えば、日本でもトップクラスだと思います。この建物の中間気密測定の結果は、C値（隙間相当面積）が $0.104 \text{ cm}^2 / \text{m}^2$ という、とても良い数値でした。二期工事が終わった後にも、もう一度気密測定をやりますよ。

Y もう住んでいるのに、気密測定はできるんですか？

S もちろんできます。高気密、高断熱の良さは、実際に体感したらよくわかるんです。今はまだ、それをわかる人しか建ててくれないというか。その手前のキャンペーンの言葉だけで他へ流れる人はいると思います。本当は、その人たちにも住んでもらいたいですけどね。でも、ぼくらはそこにお金を使っちゃうと、建物にお金を使えないんで。



建物の外壁はロックウールを使用して断熱性能を高める

**Y** 見ていると、ものすごく手間をかけて気密テープで隙間を塞いでいるじゃないですか。もういいから早く建ててって思うくらい(笑)。大工さんたちは、はじめは面倒くさがらなかつたのかな、と思ったんですけど。

**S** 気密測定で実際に数値が出るのが大きいですね。はじめは思っていたほど数値が出なかつたりして。そうすると悔しいから、じゃあ次からはもっと塞ごうとか、現場で工夫するんです。

## 家で過ごす時間が長くなる

**T** わたしたちは家を建てるなんて考えてもいなかつたんです。新築しても、そのときはいいけど、長く住めば傷んできて、価値が下がってしまうだろうと。でも齋賀さんのウェブサイトを見て、はじめにしっかりとした家をつくれば、ずっと大事に使えると知って、これだ、と思いました。

**S** もちろん、低燃費でも法的な価値は下がります。ただ、ふつうは家を新築して引き渡しをしたときが満足度のマックスなんですね。デザイン性に優れた家でも、後からああすればよかったとか、不満が出てきたりして、そのうちあちこちが傷んてきて。日本の家は、せいぜい 30 年で建て替えるという発想ですから。でも低燃費の場合は、実際に暮らしあげた後から満足度が高くなつて来るんです。初期投資はかけるけど、エネルギー効率は良いし、柱も虫に喰われない。新築特有の嫌な臭いもしない。漆喰の壁が温湿度も調節してくれるので、冬でも加湿器を使わなくて良い。家で過ごす時間が長くなる、という声をよく聞きますね。

**Y** 店に来られるお客様にも、手間をかけた家の居心地の良さが伝わると良いなと思います。最近は気候の変化も激しいですし、ますます低燃費住宅の需要が伸びていきそうですね。

**S** 他社と競合することも多くなるので、さらに良いものをつくりいかなければいけないと思っています。今は勢いがある時期ですが、もし楽な仕事をして伸びていたら、浮わついていたかもしれない。さいわい、うちはオーナーさんの要求が常に厳しいので、大丈夫です。

**Y** 何だか、胸が痛いですね(笑)。

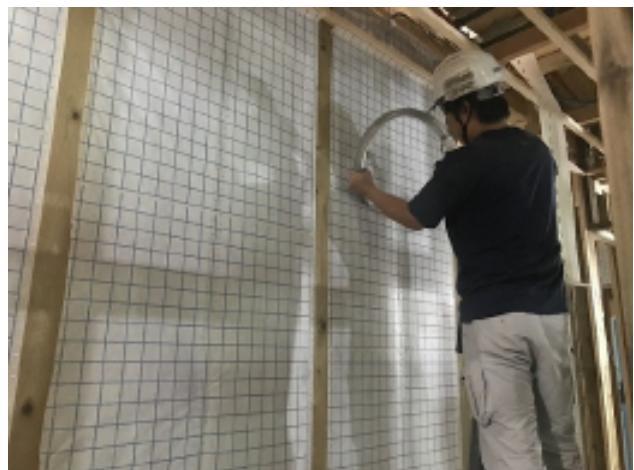
**S** 今は新築の仕事ばかりですが、これからはリフォームもやっていきたいですね。実際に体感していただくのが一番なので、たとえば窓をトリプルガラスに代えるとか、風呂場や洗面所だけリフォームするとか。部分的な改修からはじめていきたい。それでも快適さは全然違うので、ご理解いただけると思います。

**T** 齋賀さんのところの大工さんは、みなさん上品というか、対応が丁寧なので、思っていたイメージとは違いました。

**S** 少し前までは不愛想な人もいたけど、最近はみんなこんな感じですよ。もっとも、大工という職業は、今の時代にはあまり人気がないので、どこの工務店も人数の確保がたいへんです。

**Y** そうなんですか。意外な気もします。

**S** 現場は暑いし寒いし、きつい、汚い……いわゆる「3K」の仕事なので。でもホワイトカラーの仕事は、いつかAIに取つて代



内壁にセルロースファイバー(木質繊維の断熱材)を注入

わられるでしょうが、大工の仕事は違うと思っています。手に職をつけると強いんですけどね。

**Y** 大工さんが現場で加工して、ひとつひとつ手をかけて要望に応えてくれる。自分で何でも作れるってすごいな、と思って見ています。

**S** この家を作っている大工は、親方のもとで修業をしてから独立したり、親子でいっしょに仕事をしたりしていますが、今の時代は経済的な問題もあって、親方が弟子をとて技術を伝え、育てることが難しくなっています。だから、これからは会社で職人を育てていきたいですね。

うちは週休二日制厳守、残業禁止。でも納期は守れよ、と。社員も 7 時頃には誰もいなくなります。あとは社長が働けばいい。会社としても、受注の数を増やすことが目的ではなく、自分たちが手をかけてできる範囲で仕事を受けるようにしています。これからはそういう時代ですね。

**T** 完成までもう少しですが、本当に楽しみにしています。これからも、どうぞよろしくお願ひいたします。

(2019年9月19日、NANAWATAにて)





# Letters from Cafe & Patisserie

Okamura Toshiko

岡村 淑子

いよいよ、CAFE & SPACE NANAWATA がオープンします！  
オーナーである私は、美味しいものを作ることと、食べることが大好きな、パティシエです。加えて、これまで携わってきた商品開発やレシピの提案、製菓の講師といった仕事の中で、「食の安全」にまつわる分野を専門にしてきました。

そのため、NANAWATA でご提供するお菓子・お料理・お飲み物は、小さなお子さまからご高齢の方まで、すべてのお客様に安心して召し上がっていただけるものを、という思いがあります。食品添加物や農薬など「余計なもの」を極力含まない素材を厳選して、食材本来の味を活かしたものは、ただそれだけで美味しい。焼きたての香り立つクッキーの食感、ひとつひとつ手仕事で仕上げるスイーツの表情……わたし一人で作るので、たくさんの数はできませんが、だからこそ、作りたてのいちばん美味しい状態でご提供できるのが、NANAWATA の強みでもあります。

音楽やアートに囲まれた空間で、しばしの間、日常を忘れて、ゆったりした時間をお過ごしいただき、心もお腹も満たしていただけたら嬉しく思います。





## ななわたり日記 01

記録的な台風の翌日に、快晴のもとで船出をするというめぐらわせになつたカフェ&スペースNANAWATA。これからも、思いもしないことがたくさん通り過ぎていくのでしょうかが、あまり動じることなく、目の前を見つめながら生きていきたいです。

内覧会には、われわれ夫婦が以前からお世話になっている方々、友人知人とともに、ご近所の方も足を運んでくださいました。

向かいにある玉鉢ラーメンのご夫婦は、店の休憩時間のあいだにコンサートを聴きに来てくださいました。引っ越しや開店準備で慌ただしくしているとき、やさしく美味しい中華料理の味に、何度も助けられました。内覧会の日の夜も、家族5人と須恵朋子さん、そして午前中から手伝いをしてくれた両岡健太くんといっしょに、閉店間際に駆け込んで、みんなでラーメンをいただきました。

NANAWATAのある場所には、かつて時田さんという耳鼻科医院が開業していました。現在は東京に転居した時田さんご夫婦も、内覧会に来てくださいました。松江町2丁目(旧上松江町)は、「浦島」の山車をもつ地域です。川越まつりが翌週に迫り、内覧会のあいだにも、町内会の皆さんが店の前に紅白の横断幕を張っていました。時田さんは、わざわざ町内会長さんのところへ行って、自分が残した襦袢や着物を、引き継ぐことができるよう手配してくださいました。そんなわけで、まつりの当日は、慣れない衣裳に身を包んで会所に詰めることになりそうです。川越で暮らして16年目、初めて「川越の住民」になったという気分です。

「七曲り」に由来する店名は、地域に根ざして長く愛される場所にしたいとの思いも込めました。あたたかく迎え入れていただけたことを、とても嬉しく思っています。

(岡村幸宣)

## NANAWATA NOTE 01

2019年10月5日発行

2020年4月10日WEB版発行

### NANAWATA BOOKS

350-0056 埼玉県川越市松江町2-4-4  
電話 049-237-7707 FAX 049-237-7708  
メール info@nanawata.com  
ウェブサイト <https://nanawata.com>